

仏教と世界

伸びるアメリカ仏教と
ナイトスタンド・ブディスト

田中ケネス

tanaka kenneth

Night-stand Buddhists

世界で仏教の宗派が一番多く集まっている都市は、バンコクでも京都でもなく、何と、

ロサンゼルスである。現在、ロスには東南アジア、チベット、中国、韓国、ベトナム、日本等からの八十を超す宗派が共存しており、多数の仏教宗派が西洋の超大国でこのように見られることは非常に興味深い現象で、アメリカにおける仏教の発展を著しく示していると言える。

さて、このアメリカでの仏教の伸びは、アジアからの仏教移住者の増加だけによるものではなく、そのうち数十万人は、実はアメリカ生まれの改宗者によるものである。例えば、有名な映画俳優のリチャード・ギアは、ダライ・ラマ師の友人で、熱烈なチベット仏教徒であり、ティナ・ターナーという一流アフリ

カ系歌手は、熱心な創価学会(SGI-USA)信者である。

大学の場においても仏教への関心が相当な高まりを見せていて、全米のほとんどの大学で、仏教に関する授業が設けられている。また、ハーバード、プリンストン、コロンビア、ミシガン、スタンフォード、カリフォルニア等という伝統のある大学では、充実した仏教学専攻課程も設置されている。一九九六―九七の二年間で、北米で仏教に関する七十九の博士号が出ており、これは、日本を上回る数字である注1。

それでは、アメリカにおける仏教徒の人口はどのくらいであろう。専門家の多くは、約三百万人と見ている。これは、アメリカの人口の約一パーセントに当たる。しかし、これ

に正式な仏教徒ではなくても仏教に何らかの強い影響を受けている人たちを含めれば、この数字は、三百万の数倍にまで跳ね上がり、ある調査によれば、約二千五百万人という驚くほどの数となっている注2。

さて問題は、このように「仏教徒」と断言せずに、仏教に興味をもっている人々をどう名付けるかということである。つまり、夜自宅で床に就く前に仏教書を読み、個人的にメデイテーションを行うこのような人たちのことである。これらの人々をトマス・トイード教授は、「ナイトスタンド・ブディスト」(night-stand Buddhists 夜の電気スタンド仏教徒)と、ユーモア的に呼んでいる注3。このナイトスタンド・ブディストたちの特徴は、一、特定の宗教団体に関わらず、二、自分の「体

「験」を重視する、という性質を有している。ナイトスタンド・ブディストの代表として、私は、かの有名なNBAバスケットボールのフィル・ジャクソン監督を挙げたい。彼が仏教の感覚と思想を導入しながら、優勝九回というめざましい成果をあげたことは有名であるが、彼は決して、自分を「仏教徒」であるとは断言しないのである。また、禪に惹かれてもいるようなのだが、特定な禅宗の組織に深く関わりをもたず、禅以外の宗派や仏教以外の宗教の集まりにも参加している。

ジャクソン監督もそうであるように、ナイトスタンド・ブディストたちは、自分が納得できる「聖なる体験」、つまり、スピリチュアリティ（一般的に言われている「霊性」ではない）を強く求めるのである。彼らが仏教に強く惹かれるのは、仏教をキリスト教やユダヤ教のような、いわゆる「宗教」と受けとめず、スピリチュアリティを最も実現可能とさせる「修行法」をもった宗教であると見ているからである。この修行法とは、主に禪の坐禅と南方仏教のヴィパッサナーとチベット仏教の瞑想というメディテーションを指すのである。

彼らが抱いているメディテーションへの魅力は、精神安定や集中力を求めるところにもあるが、同時に宗教的な教理に基づく信仰という言葉への否定から、実践（practice）へ

の肯定という、パラダイムの変換を象徴していると言える。そして、このような実践や体験を重視するナイトスタンド・ブディストたちは、「個人化宗教」（privatized religion）という現象を示していると言えるのである注⁴。

この個人化の原因の一つは、世俗化である。社会宗教学者のピーター・バーガー教授によると、この世俗化は非独占化（demonopolization）という現象を生み、また、その非独占化は、多様な状況（pluralistic situation）という現象を生むのである注⁵。この多様な状況の特徴とは、いままでのように支持者が必然的についてくるという保証はなく、人々はマーケット原理にしたがつて自分が納得できるものを求め、それを見つけたら、いままでの宗教や宗派を捨てて新しいものを支持することである。

また、この多様な状況は、地域社会の弱体化や国境が薄くなるグローバル化に伴うもので、これにより人々は精神的にも、所属する団体より自分自身を頼りにすることになり、このような「団体」から「個」という動きが、個人化宗教を促進すると考えるのである。

そして、この個人化宗教には、ある程度の社会の豊かさや実質が必要とされる。評論家の宮崎哲弥氏も指摘されているように、今日、人々が仏教に惹かれる要因は、「貧・病・争」に契機するのではなく、比較的豊かな先進国

の生活環境にあるのである注⁶。つまり、仏教の真価が、ある程度豊かな生活環境に暮らす人々に発揮されつつある。そして現在、アメリカに浸透している仏教が、実にこの個人化宗教の条件を満たしている。したがって、今後も欧米（ヨーロッパでも仏教は伸びている）では、ナイトスタンド・ブディストの数が増え、新しい仏教の芽が開いていくことが予測される。

注¹ Appendix B, in D. Williams and C. Queen eds, *American Buddhism* (Curzon Press, 1999), pp. 307-311.

注² Robert Wuthnow and Wendy Cage, "Buddhists and Buddhism in the United States: The Scope of Influence," *Journal of the Scientific Study of Religion* Vol.43, No.3 (Sept. 2004): 363-380.

注³ Thomas A. Tweed, "Night-stand Buddhists and Other Creatures," in *American Buddhism*, p. 74.

注⁴ Kenneth K. Tanaka, "Epilogue: The Colors and Contours of American Buddhism," in Charles Prebish and Kenneth Tanaka, eds, *The Faces of Buddhism in America* (Univ. of Calif. Press, 1998), pp.

注⁵ Peter Berger, *Sacred Canopy* (Doubleday, 1966), pp. 134, 137.

注⁶ *Tsukiji* 築地本願寺新報、二〇〇五年十月、五頁。